



田検小学校  
ヒストリア ～歴史秘話～  
第5号 (25.10.28)

先週の台風 27 号の対応では、皆様の御理解と御協力をいただきながら子どもたちは安全に登下校することができました。ありがとうございました。

さて、前号では、「田検小学校の始まりは、明治 13 (1880) 年に設置された芦検小学校」であったということ、「昭和 42 年に須古小学校が田検小学校に統合された。それは県下でも稀有(めったにない)と言うべきスムーズな学校統合であった」というヒストリアを紹介しました。今回(第5号)は、その続きです。

「ヒストリア」は毎回、子どもと一緒に、時には家族みんなで読んでくださると嬉しいです。

## 1 田検小学校と須古小学校が、スムーズに学校統合できたのは、なぜ？

学校が統合された昭和 42 年に、校長として赴任された鎮原照治(しずはらてるじ)先生が、「在職時の追憶」(昭和 55 年 11 月 11 日発行『創立百周年記念誌』に所収)に以下のように書いていらっしゃいます。

その理由として考えられることを幾つか思い起こしてみましよう。

### 1 社会情勢の進歩変貌

その一つは何百年来、舟で渡らねばならなかった深い入江が復興事業の干拓工事の完成によって、湯湾・須古が地続きになり、田検への通学が容易になったことでしょう。

もう一つは、須古校区民の気性と決断力があつたと考えられます。…<中略>…過疎化は急速に進み、須古校の児童生徒の減少も著しく、複々式学級(3 学年で 1 学級)にまでなろうとしていたのです。この教育危機を須古校区民が真剣に受け止めて検討を重ね、紆余曲折を経て幾つかの条件を付けて、母校を失う悲しさを押さえ、子弟の将来のためにと統合に踏み切ったのだそうです。

### 2 当局や学校関係者の事前準備が綿密周到になされたこと

スクールバスの運営、その他の条件整備も着々と実施されました。また急激な学習環境の変化による児童生徒の心理的動揺や父兄の不安を緩和する方策として、田検・須古合同の運動会や学芸会を催すなどして両校の子ども同士、先生、父母同士の馴染みを深めるなど、さまざまな努力が積み重ねられたのでした。

### 3 統合当初の在職教師団の努力

条件の一つとして、須古校教師の代表格の菊池正先生が田検小に配置換えされたことも、当初の子どもたちにとって、心強さを覚えたことでしょう。

そして田検小では留任組はもとより新しく転入した職員も、「統合後の順調な学校運営」を至上命令として、総力を結集して努力されたのでした。

学校運営の中で、委縮させず、しかも甘やかさず早く溶け込ませるよう、受け入れ児童の扱いには、随分と気苦労が多かったようです。また、バス時間の変動に伴う時間差による諸問題への対応、例えば、クラブ活動で乗り遅れる子どもを自家用車で送り届けるとか、放課(定められた一日の授業が終わること)が早く時間を持て余す低学年児童たちへの対策等々。誠に涙ぐましき努力を尽くしてくださったのでした。

以上のような大勢の人々の善意と努力の結集が、稀にみるスムーズな学校統合として実を結んだものと思われまふ。【鎮原照治「在職時の追憶」より抜粋】

## 2 子どもたちの様子は、どうだったのでしょうか？

当時の親や先生も、「いじめ」「仲間外れ」「学力の低下」を一番心配されていたようです。

### (1) みんな仲良し

いよいよ学校が統合してみると、人数の少ない須古の子どもがいじめられたり仲間外れにされたりするどころか、放課後や土曜日、日曜日になると、湯湾をはじめ田検、石原、芦検など各集落の子どもたちが須古や部連集落にどっと押し寄せて、大勢の子どもたちが集まってにぎやかに仲良く遊んでいたそうです。

そのことを「父母たちは世相の移り変わりに驚嘆しつつも、すっかり安心し喜んだものでした」と鎮原校長先生は記されています。

### (2) 自尊心を取り戻して大いにハッスル

新しい友達環境になったことで、それまで固定化されていた学力関係(健全な競争心を伴って)が、すっかり変わってきたそうです。それは学習面での子どもたちの取組にも変化が現れたと記録されています。

「今までいくら言っても勉強しなかったのに、この頃は親が黙っていても勉強するようになった」「自分の力もまんざら捨てたもんじゃない。もったきばるぞ」「このままでは抜かれてしまう」などと、自尊心を取り戻す子や奮起し始める子がたくさんいたようです。

「多人数の集団生活に馴染むにつれて、一人一人が地力を発揮するようになった」「子どもが自尊心を取り戻して大いにハッスル」いう記録もあります。

「みんなが仲良し」「自尊心を持って大いにハッスル」。このことは、歴史を経た今も学校の子どもたちや校区の皆さんの心根や心意気として、しっかりと受け継がれているように感じています。

これから先もずっと大事にして、さらに太く大きく育てていきたいです。

(文責：福田裕生)